シャーロット・ブロンテ初期作品研究(1)

—グラスタウン物語の形成過程—

岩 上 は る 子

(平成元年6月30日受理)

序

現在クリスティーン・アレグザンダー (Christine Alexander) によってシャーロット・ブロンテ初期作品のはじめての網羅的な編集が進められている。第一巻の *An Edition of The Early Writings of Charlotte Brontë* (1987) が Shakespear Head Press／Basil Blackwell社より出版され，残る2巻が完成すれば今後のシャーロット・ブロンテ初期作品研究の基本的資料になることは確実である。ブロンテ姉弟妹による初期作品の存在はすでにギャスケル夫人によって明らかにされながらも，これまで初期作品全体を取りあげた本格的な学術研究はなされていなかった。その第1の原因として，原稿それ自体の不備があげられる。原稿の量は後のシャーロットの全小説を上回るものでありながら，これまで出版されたものはその半分にも満たない。原稿の大きさはマッチ箱ほどのものからせいぜい名刺大のもので，そこに豆粒のような字体で書きつらねられていたため，その判読と筆写には膨大な時間と労力がともない，編集が進まなかったのである。また第2の原因としてオリジナル原稿の散逸があげられる。シャーロットの夫ニコルズから原稿を買い取ったブロンテ学者T・J・ワイズ (Thomas James Wise) はそれらを編集しなおし，私家版として出版した。かなりの部分がアメリカその他の国々にわたり，紛失したものも多かった。そのためもとの原稿の復元が難しく，初期作品の全貌はいまだ確定していないというのが現状である。

これまでの初期作品の研究者としてはファニー・E・ラチフォード (Fannie Elizabeth Ratchford) とウィニフレッド・ジェラン (Winifred Gérin) があげられる。ラチフォードによる *The Web of Childhood* (New York : Columbia University Press, 1941) は，ブロンテ姉弟妹の初期原稿，書簡，日記などを広範囲にわたって引用し，子供たちの架空の物語世界に脚光をあてた画期的な研究であった。またジェランは新しい伝記調査にもとづき *Branwell Brontë : A Biography* (London : Hatchinson, 1961) および *Charlotte Brontë : The Evolution of Genius* (Oxford : Clarendon, 1967) を著し，初期作品の出典や後の小説との関連を論究している。ともに先駆的研究として高く評価されているが，ラチフォードとジェランは初期作品の重要性を力説するあまり，後の小説への影響を過大視する傾向が見られた。後の小説中の人物，状況，筋，人間関係などを初期作品の中に直接見

いだそうとする姿勢は短絡的といえよう。

シャーロットの初期作品の編纂に先駆けて出版されたアレグザンダーによる研究書 *The Early Writings of Charlotte Brontë* (Basil Blackwell, 1983) は，慎重に推論を控え初期作品の忠実な紹介に徹している。量的にはシャーロットのそれに匹敵すると思われるブランウェルの作品についても従来のシェイクスピアヘッド版の *The Miscellaneous and Unpublished Writings of Charlotte and Patrick Brontë* (vol. 1, 2, 1931—38) などをもとに，初期作品世界の構築におけるブランウェルの役割を考察している。初期作品は子供たち4人の共同作業の中から生まれたものであり，作者が特定し得ないもの（筆名を用いたり，署名のないものもある）が含まれている。さらにT・J・ワイズが初期作品を入手し編集したさいに，シャーロットの署名を書き入れたとの指摘もある。

本稿ではアレグザンダーによる版と研究書を中心に，シェイクスピアヘッド版を補足資料としてラチフォードおよびジェランを参照しつつ，初期作品の概要を紹介する。子供たちによる「劇」のはじまりから「グラスタウン」の建設，さらに「アングリア王国」への発展をあとづけていく予定である。物語は最初から明確な構想のもとに書かれたわけでなく，子供たちが空想の世界を広げながら10年余りにわたって思い付くままに書きつがれていったため，たがいに錯綜し全体の流れを把握することは容易ではない。しかも必ずしも年代順に展開していったわけではなく，人物もしばしば名前が変わり，性格も変貌し，人間関係もこみいって発展していった。ここでは膨大な初期作品を第1期 (1826—30)，第2期 (1831—35)，第3期 (1836—39) と分け，今回はその第1期の中心となる「アングリア物語」の形成過程をたどり，シャーロットの創作の特徴を浮き彫りにしたいと考える。

(一)劇の発端

これまでブロンテ作品といえば，ただちに「アングリア物語」として一括される傾向があった。1826年の兵隊人形遊びに始まり，アフリカの架空の王国が建設され，その国王のザモーナ公爵と首相のノーザンガーランド伯爵が覇権を争い愛憎劇をくりひろげたものとして紹介され，シャーロットの後の小説の愛と結婚のテーマの基点になったと理解されるのが一般的であった。だが実際に上記のような物語世界が形成されたのは，子供たちのいわゆる劇づくりの遊びがはじまってからかなりの時間を経てからのことであった。たとえばシャーロットの最初の恋愛物語とされる'Albion and Marina'が書かれたのは1830年10月12日であった。グラスタウンという地名が使われたのも'The Search After Happiness', (1829年8月17日，以下17.8.1829と略記する）が最初である。おそらくはじめのうちはたわいのない人形劇でその場かぎりの役を演じていた人物が，しだいに一貫した役柄と舞台をもつ継続的な物語へと発展していったものであろう。子供たちはそれぞれの主人公と舞台を

共通の枠組として思いおもいの物語をつくりだし，たがいに演じあったと思われる。やがてその物語を紙に書きとめ，挿絵や地図，タイトルページを付けてミニチュアの本や雑誌をつくることに熱中していったのである。

子供たちの劇についての最初の言及は，シャーロットによる4ページあまりの原稿'The History of the Year'（12.3.1829）にみられる。そこには4人が1826年6月から1827年12月にかけて三大劇をつくったことが記されている。すなわちブランウェルの兵隊人形に命名することから始まったYoung Men（6. 1826），イソップ寓話を参考にしたという巨人の話Our Fellows（7. 1827），各自が島を持っていると想定して実在の人物を族長としたIslanders（12. 1827）である。このうちOur Fellowsは短命に終ったらしく，それについてはシャーロットのわずか1枚の原稿'The Origin of the O'Deans'（12. 3. 1829）とブランウェルの断章がいくつか残されているに過ぎない。ほかの二つの劇は1年半にわたって並行して進められるが，やがて一つの舞台グラスタウンへと融合されていく。

Young MenとIslandersの成立や展開については後にくわしく述べるが，この二つの劇は当初は舞台も登場人物も別なものであった。Young Menは西アフリカの架空の都市（GlasstownのちにVerreopolisからVerdopolisと改名）を舞台とし，子供たちは守り神（ブランウェルがBrannii，シャーロットがTallii，エミリがEmmii，アンがAnnii）の役で物語に介入する。いっぽうIslandersの舞台は当初は実在の島々で，その気候や風土はイギリス的である。子供たちは超能力をもつ小王と女王（Little King and Queens）として登場する。いずれの劇も超自然の世界であり，シャーロットの英雄ウェリントンはどちらでも主人公になっている。以下では1829年から1830年までの主要な作品をYoung MenとIslandersのふたつの劇に分類して紹介する（いずれの劇にも属さない作品については別に取り上げる）。基本的にはYoung Menの劇は'(Blackwood's) Young Men's Magazine'に，Islandersの劇は'Tales of the Islanders'に収録された物語群から構成されている。ふたつの劇が融合された'Albion and Marina'（12.10.1830）をもってグラスタウン物語の成立とし，全体の構成を本稿の最後のページに図で示した。

Young Men

子供たちの最初の劇Young Menが始まったのは1826年6月のことだった。その成立の事情については，これまで語られてきたとおりである。6月5日，ブロンテ氏はリーズでの聖職者の集まりに出席した後，夜遅く子供たちへのお土産を抱えて帰宅した。そのなかのブランウェルへの12個の兵隊人形が子供たちを夢中にした。彼らはそれぞれのお気に入りの人形を選んで名前をつけ，総称としてYoung MenあるいはTwelvesとよび，彼らを主人公とした冒険談を作り出していった。この日の出来事はシャーロットが先の'The History of the Year'のなかで，ブランウェルが1年半ほど遅れて'The History of the Young Men, From Their First Settlement to The Present Time'(15.12.

1830—7.5.1831）でより詳細に記している。それによればこのブランウェルの兵隊人形は1824年に最初のものを買い与えられて以来4組目のもので，その後もトルコの楽隊人形やインディアン人形を自分でも買い足していることがわかる。子供たちの想像をかきたてた人形は無くなったり壊れたりあるいは後で見つかるなどして，それは物語のなかで負傷や行方不明あるいは生き返るというストーリーとして反映された。風変りな人形たちは原住民に見立てられた。小さな人形を操る子供たちがガリヴァーのように巨人の役を演じたのも自然な成行きであったと思われる。

子供たちが人形につけた名前はシャーロットがウェリントン公爵，ブランウェルがナポレオンであった。ともに歴史上の宿敵どうしで，　現在も活躍中（この時点ではウェリントンはまだイギリス政界に君臨し，ナポレオンは1827年5月にセント・ヘレナ島で失意のうちに死亡したばかりである）の英雄たちであったのに対し，エミリとアンは人形たちの印象からGraveyとWaiting Boyと名付けられた。だがのちに姉や兄の主人公たちに見劣りしないようにと，当時の著名な探検家の名をとってパーリー（Parry）とロス（Ross）に改められた。

シャーロットの'The History of the Year'に収録されている'A Romantic Tale'別名'The Twelve Adventures'（15.4.1829）から物語を追ってみる。'The Country of the Genii'と副題がつけられた第1章では，その昔この島に渡来した古代ブリトン人とガリア人についてふれ，さらに「パーネル船長の旅行記」からの引用という形で，砂漠で嵐にあった旅人が島の先住民族である巨人の白骨を発見する模様が描かれる。第2章'The Voyage of Discovery'では，「無敵号」（Invincible）に乗り組んだ「十二人の勇士」がイギリスを出航し，嵐で航路をはずれアフリカ沿岸に流れつき，原住民のアシャンティ族の襲撃を受けながらも街の建設に取りかかる。第3章'The Desert'ではアシャンティ族の襲撃にそなえて策を練る勇士たちの耳に守り神のお告げがきこえ，一行は砂漠にむかう。そこで守り神の宮殿に招じ入れられ，アーサーがウェリントン公爵として迎えられる。最後の第4章'News from Home'では，アシャンティ族を撃退した勇士のもとへイギリス船が漂着する。ウェルズリはその船を修理し，対ナポレオン戦争支援のため故国に向かい，20年後に大艦隊を率いて凱旋する。ヨーク公爵は王位をウェルズリことウェリントン公爵に譲り帰国の途に着く。

同種の内容をブランウェルは一年余りをへて'The History of the Young Men'で，6章にわたってより詳細に記している。勇士たちの植民地はすでにグラスタウンと呼ばれ，東西1700マイル，南北500マイルで，東には広大な砂漠，西には北大西洋，南にはギニア湾，北にはジベル・クムリ（「月の山」）の連峰が控えているというように明確な地理的背景をもっている。さらにブランウェルは4人の王国（ウェリントン国，パーリー国，スニーキー国，ロス国）とその他の島々（勇士の仲間であるスタンプスとマンキーの島やフランス人の島）を示した詳細な地図を添え，主要な都市，道路，河川，山脈などを書き入れている。すでにグラスタウン連邦の骨格は固まり，連合国の中心としてグレイト・グラスタウンが位置づけられている。

ブランウェルはシャーロットとおなじ主題を扱いながらも，もっぱら若者たちとアシャンティ族との戦いを中心に描き，いくつかの戦闘場面を作り上げ，古代ギリシャやローマの戦いになぞらえている。シャーロットはおそらくそうした弟による戦争の繰り返しに飽きたのか，あるいは出番がなかったのか'A Romantic Tale'のあとは若者たちの劇のためになにも書いていない。ふたたび若者たちに関心を持つようになるのは，1829年8月になり「雑誌」の編集をブランウェルから引き継いでからである。

'Tales of the Islanders,volume I'

ここで子供たちの第3作目で最後の劇であるIslandersを紹介しておきたい。Young Menはブランウェルの人形を発端としていたこともあって，彼が主導的であった。それに対してIslandersは各自が島を持つというシャーロットの提案に基づいていたので，彼女は自分の主人公（ウェリントン公爵と2人の息子）を中心におとぎ話，冒険談，政治寓話など多彩な物語を展開させることができた。島人たちの劇の起こりについては'The History of the Year'に収録された'The Origin of the Islanders' (12.3.1829) に記されてから3カ月ほど経て'Tales of the Islanders, volume I' (30.6.1829) の第1章で'An Account of their Origin'として書きなおされている。そこでは冷たいみぞれの降る11月のある寒い晩に，所在なく暖炉をかこんでいた子供たちがそれぞれの島をえらび，お気に入りの人物を族長に決めるようすが劇的に描かれている。かれらが選んだ島はマン島，アラン島，ワイト島，ガーンジー島などのいずれもイギリス周辺の島々であり，また族長もウェリントンと息子たち，ウォールター・スコット，リー・ハントといった実在の人物たちである。

だが第2章'A Description of Vision Island'になると先ほどの島々は忘れられ，代わって巨岩，激流，滝などがロマンティックな風景をつくりだすVision Island（夢想島）が構想され，そこに貴族の子弟のための学校が創立される。子供たちは小王と女王たちとして島に君臨し，ウェリントン公爵はかれらに仕える長官となっている。学校の経営，管理は多忙な公爵に代わってふたりの息子ドゥアロウ侯爵とチャールズ卿にまかされる。息子たちの名前が初期作品に登場するのはこれが最初である。この学校での生徒の反乱を扱った物語が，この年の12月の'Tales of the Islanders' 第2巻に書きつがれる。第1巻の3，4章はウェリントン公爵と息子たちを中心とした冒険物語で，いずれも実際の政治事件にもとづいている。第3章'Raton's Attempt'はウェリントン公爵の毒殺未遂事件で，これは『リーズ・マーキュリー』紙で公爵が展開したホイッグ批判と関係がある。第4章'Lord Charles Wellesley and the Marquis of Douro's Adventure'はドゥアロウ侯爵とチャールズ卿の誘拐事件であるが，ここでも実在のレオポルド公とヒル将軍の名前があがっている。そうしたリアルな場面設定が成されている一方では，子供たちはYoung Menの守り神と同じように，Islandersでも超能力をもつ小王と女王たちとして登場しdeus ex machina的な役割を演じている。

(二)劇の発展

'Blackwood's Young Men's Magazine'

若者たちによってグラスタウンが建設され，国王も選出され，アシャンティ族との戦いも終結すると，シャーロットとブランウェルはこの新しい社会の文化面にも目を向けるようになった。そこで考え出されたのが若者たちのための月刊雑誌である。父が購読していた *Blackwood's Magazine* にならって，そこにはエッセイ，詩，架空の書物や絵画の批評，著名人の対談広告などが掲載された。大きさはマッチ箱ほどだが，目次やタイトルページなどで体裁を整えている。子供たちが異様に小さな本を作ったのは人形の大きさにあわせてのことであり，また活字体で書いたのもできるだけ印刷の文字に似せようとしたためであった。

ブランウェルによる創刊号（1.1829）と6月号，7月号，その後シャーロットの編集による2シリーズ（8—12.1829および8—9.1830）が現存している。ブランウェルが編集長であった時期（1—7.1829）は'Branwell's Blackwood's Magazine'と呼ばれ，ほかの子供たちも投稿していたようである。シャーロットの'The Enfant'は，もとはこの6月号と7月号に連載されたものであった。1829年8月に雑誌を譲られたシャーロットは，名称を'Blackwood's Young Men's Magazine'と改め，その年の12月までに合計6号（12月には2号）を出している。ほとんどがシャーロットの原稿から成っているが，ときにWT（We Twoの意）やUT（Us Twoの意）と署名されているものもあり，それらはブランウェルとの合作と考えられる。

6号の雑誌に載せられた作品は全部で24篇（広告は除く）あり，内訳は物語が8点，詩が10点，劇が3点である。詩の多くがUT作となっているが，内容的にはかなり対照的なものがあり，シャーロットとブランウェルがグラスタウンに君臨する守り神の庇護あるいは支配をめぐって対立していたことを伺わせる。たとえば8月号の'A Song'は守り神の専制に抗議し，彼らの手から自由になることを夢見た詩である。だが9月号の'The Glass Town'では夕陽に輝くグラスタウンの栄光と神がみの絶対支配を謳いあげている。12月号には二つの詩が掲載されている。はじめの'Lines Spoken by a Lawyer on the Occasion of the Transfer of This Magazine'はWT作となっているが，これは明らかにブランウェルの作品と思われる。そこで彼はシャーロットに雑誌を譲ったことを後悔し，かつての真面目で重厚な雑誌がいまでは愚かしいロマンスや軽薄な物語にとって代わられたと嘆いている。それに対しつぎの'Lines by One Who was Tired of Dullness Upon the Same Occasion'では，重々しい退屈な書物より，守り神やその華麗な宮殿の描写の方がはるかに楽しいというシャーロットの反論がくりひろげられている。ふたりのライバル意識はCaptain Tree（シャーロットの筆名）が，機会あるごとにCaptain Bud（ブランウェルの筆名）の大げさな文体をからかっていることでも分かる。

物語はすべてシャーロットの創作だが，実名による5点のほかにトリー大佐の筆名で2点，守り神として1点書いている。さらにこれ以外に劇仕立の対談が3点ある。これらの作品の主題はさまざまだが，いずれの号にもなんらかの形でウェリントン公爵と二人の息子アーサーとチャールズが取り上げられ，グラスタウンの情景や守り神の宮殿の描写が織り込まれている。8，9月号に連載された'A True Story'は17，18歳頃のアーサーとチャールズが，洞窟でくり広げられる守り神たちのふしぎな宴会を覗きみる話である。この頃のふたりはともに端正な顔立ちの若者で，あまり見分けがつかないが，12月号（第2号）に掲載された'Conversation'におけるふたりのやりとりを見ると個性の違いが現われている。吹雪が舞い，氷柱が下がり，樹氷の見られる冬が好きだというアーサーにたいし，チャールズは道で足をすべらせくじいたり霜焼けに悩まされる冬のどこがよいのかと応酬し，ロマンティックな兄をからかっている。

Young MenやIslandersの劇の成立当時は，シャーロットの英雄は一貫してウェリントン公爵であったが，やがて物語の主役は息子たちに移行していく。ウェリントン公爵に対するシャーロットの態度は'Anecdotes of the Duke of Wellington'（7—10.1829）が示しているように，完全な英雄崇拝であり，その描写も一面的な賛美に終始している。だが息子たちについては'Characters of the Celebrated Men of the Present Time'（12—17.12.1829）の第2章に見られるように，細かな性格描写が試みられている。それによれば22歳のドゥアロウ侯爵は性格は穏やかで思いやりがあり，冥想を好むもの静かな青年となっている。それに対しチャールズ卿は機知にとみ，潑剌として空想をめぐらすのが好きである。こうした性格はそのまま受け継がれていくわけではないが，シャーロットが1829年の末には対照的な兄弟の人物造形を行おうとしていたことがわかる。

'Tales of the Islanders, volume II'

1829年の8月に雑誌をうけついだことでシャーロットの関心は急速にYoung Menに向けられていったが，Islandersも忘れられたわけではない。'Tales of the Islanders'第1巻につづいて第2巻が10月から12月にわたって書かれている。すでに見たように第1巻の3，4章は実際の事件に取材した政治寓話で，Young Menの架空性，物語性，詩的雰囲気とはまた違ったシャーロットのジャーナリスティックな側面をうかがわせた。そうした時事的関心は'Tales of the Islanders'第2巻の大きな特徴になっている。とくに第1章'The School Rebellion'（6.10.1829）は，夢想島の宮殿学校での生徒の反乱前夜を描いているが，シャーロットは物語を脱線して，現実のカトリック解放令をめぐる議会情勢や法案可決のニュースを伝える新聞を読んだときの牧師館のようすを記録している。つづく第2章では生徒たちの「内乱」の知らせがロンドンの公爵のもとに届き，かれは気球にのって島に駆けつけ強権を発動して内乱を鎮圧する。生徒たちがポリニャック王子，ジョニー王子，ジョニー・ロックハート，ヴィクトリア王女（いずれも実在の人物）を指導者として4つのグループに

分かれ武装して相争うというのは，法案可決に先立つさまざまな派閥の動きや駆引きを象徴しているものと思われる。現実のウェリントン首相はピール内相とともに1829年4月にカトリック解放令を通過させたが，これによってトーリー党の支持を失い1830年2月に退陣に追い込まれるのである。

第3，4，5章はそれぞれ独立した冒険談である。第3章'The Strange Incident in the Duke of Wellington's Life'（21.11.1829）は，狩りに出かけたまま帰らないアーサーとチャールズの捜索に出かけたウェリントン公爵一行が，守り神の導きで巨岩の中の洞窟に押し込められたふたりを発見し，全員が守り神の手でストラスフィールドセイの公爵の館（実際の公爵の別荘）に無事戻される話である。第4章'Tales to His Sons'（21.11.1829）では，公爵がスペインのサラマンカで体験したふしぎな出来事をかたる。夕暮れに森を散歩していた公爵の目の前に巨大な鏡が現れ，「来世」という文字を映し出したかと思うと，つぎに黄金の鎖で結ばれた大小ふたつの島々が浮かびあがる。やがて「偏屈」の焼印を押された怪物が海上に現れ，小島を荒しはじめる。怪物に追いまわされている「ローマ教」という老人は，はじめは逃げ回るだけであったが，しだいに頑強に抵抗するようになり，二つの島を結ぶ鎖を引きちぎろうとする。そこに戦士が登場し，天の楯に守られながら怪物を正義の矢で射止める。島はふたたび緑に覆われる。まずこの物語の舞台となっているサラマンカは，ウェリントンが半島戦争（1808—14年，ウェリントンの率いるイギリス軍がスペイン，ポルトガル軍と連合して，イベリア半島に進入したナポレオン軍を撃退させた戦い）で勝利を治めた街である。鏡に映ったふたつの島とはイギリスとアイルランドの象徴で，これは当時のアイルランド問題を寓話化した物語といえる。つぎの第5章'The Marquis of Douro and Charles Wellesley's Tale to His Little King and Qeens'（2.12.1829）もカトリック問題に関連した物語である。アイルランド南部の富豪の家に生まれカトリック教徒として育てられた旅人が，ローマ・カトリックの邪悪さや異端性を知るにいたり，さらに聖書のことばをみずから学び，神の言葉にもっとも近いと思われる英国国教会に改宗したいきさつを語る。'Tales of the Islanders'第2巻は第1巻とおなじように，当時の政治事件に取材し実在の人物をモデルにした政治寓話である。

当時13歳のシャーロットはYoung MenとIslandersのふたつの劇を主催し，物語，詩，劇，批評とあらゆるジャンルの原稿を書きまくった。ときには編集長として，ときには筆名を用いて，さらにはグラスタウンの架空の作家，芸術家，詩人，批評家のすべての声をひとりで代弁したのである。その主題も架空の物語，ナポレオン戦争の歴史，現在の政治状況と多岐にわたっている。そしてこの旺盛な創作意欲と創作世界はほとんどそのまま変わることなく1830年にも受け継がれていく。

㈢劇の終結

1830年には前年に引続いて'Tales of the Islanders'第3，4巻と'Young Men's Magazine'の第2シ

リーズが出されたほか，'The Poetaster, A Drama in Two Volume's, 'Visits in Verreopolis', 'Albion and Marina', それぞれEdouard de CrackとErnest Alembertを主人公とした冒険物語など，前年の2倍近くにあたる量の原稿が書かれている。個々の作品については後述するが，29年と30年の原稿で目立った違いを3点指摘することができよう。まず第1点はシャーロットの筆名であったトリー大佐が，30年になるとチャールズ卿もしくはドゥアロウ侯爵にとって代わられていることである。トリー大佐の作になるのは'Young Men's Magazine'第2シリーズに収録された'Frenchman's Journal'および短い紀行文が一篇あるだけである。1830年の散文原稿の大半はチャールズ卿によるもので，シャーロットは意識的に彼の皮肉な視点と語りを作り上げていく。第2点としては，1829年の原稿にしばしば見られたUTないしWTの署名が30年の原稿にはまるで見あたらないことである。ブランウェルは29年8月にシャーロットに雑誌を譲ってから半年ほどは投稿を続けていたが，その後は自作に専念していたものと想像される。この時期のブランウェルの原稿としては，すでに言及した'The History of the Young Men' (15.12.1830—7.5.1831, 全6章) と'Letters From an Englishman' (9.1830—8.1832, 全8巻) が残存している。グラスタウン物語の創作過程でシャーロットとブランウェルがどの程度まで協力しあっていたかは特定しえないが，30年には前年のように共作であることを明記した作品は見あたらない。第3点としてあげられるのは，30年にはシャーロットの関心がグラスタウンに集中してきていることである。じっさい'Tales of the Islanders'のほかに数編の原稿をのぞけば，ほとんどがグラスタウンを舞台に展開している。1829年にはいちおう二つの世界として書き分けられていたものが，1830年に入るとYoung Menの舞台すなわちグラスタウンを中心に展開するものが大半を占めるようになる。

'Tales of the Islanders, volume Ⅲ,Ⅳ'

続いてIslandersの劇の最後となる'Tales of the Islanders'第3巻(5.5—18.5.1830) と第4巻(14—30.7.1830) について述べる。そもそもIslandersはリアリスティックな背景と人物，政治事件などを題材としていたが，第3，4巻では第1，2巻の政治寓話や風刺は影をひそめている。たしかに第3巻第1章の'The Duke of Wellington's Adventure in the Cavern' (5.5.1830) の冒頭や，第2章の'The Duke of Wellington and the Little King's and Queens' Visit to the Horse Guards' (8.5.1830)のように，ダウニング街10番地や近衛騎兵旅団の愉快な情景描写は見られるが，そこに政治的意味合いはない。1830年には前年のカトリック解放令やアイルランド問題ほど緊迫した問題がなかったというのも理由の一つであろう。今のシャーロットの関心はむしろ第1章に描かれたような冒険物語にむけられている。女王のひとりからドゥアロウ侯爵の身に危険が迫っていることを知らされたウェリントン公爵は，在郷軍人のセリンガパタンとチャールズをともなって侯爵の捜索に向かう。一行は断崖，絶壁，大滝をこえ，ついに巨大な洞窟にいるドゥアロウ侯爵を発見し，超

自然の力に助けられて全員がそろって生還する。

超能力をもつ小王と女王たちの活躍は第1，2巻でも見られたが，第4巻の第1章'The Three Old Washerwomen of Strasfieldsay'での彼らは，ウェリントン公爵の別荘ストラスフィールドセイで召し使いとして働くことになり，そこでいろいろな珍騒動を巻き起こす。好奇心が強くいつも他人の詮索ばかりしているチャールズ卿をさんざんからかうのである。ブランウェルと姉妹3人を表す小王と女王たちは，ここでは正義を行う神的存在としてではなくいたずら好きな妖精となっている。第4巻の第2章'Lord C.Wellesley's Tale to His Brother'は，コーカサスに住む木こりミルザのふしぎな冒険談である。これはチャールズ卿が聞いた話を兄にかたるという形式をとっている。ある日の夕暮れ，ミルザは竜によって月につれ去られ，つぎには怪鳥の巣に運ばれて，さらに鷲につかまれ途中で巨人の女の国に墜落する。そこで山の神の生けにえにされるのを奇跡的に逃れ，目が覚めると元の小屋に戻っていたという話である。'Tales of the Islanders'はこの第4巻をもって終結する。1829年に書かれた前半の2巻は全体として時事，政治問題の寓話という印象が強い。それに対して1830年の後半の2巻は全4章のうち3章までが冒険や魔術の話で占められており，シャーロットの関心の推移を物語っている。政治寓話から幻想物語への傾斜は，後に取り上げる'Young Men's Magazine'にも伺われ，1830年におけるシャーロットの作品世界のひとつの特徴となっている。

幻想物語

ここでIslandersにもYoung Menにも分類できない作品について触れておきたい。ひとつは1829年に書かれた'Two Romantic Tales'第2章の'An Adventure in Ireland'（28.4.1829）で，それは幽霊が出没するという噂のあるオキャラハン城に泊まった主人公が受けた「精霊がブラニーからお守りくださいますように」というアイルランド式の挨拶が引き起こす悪夢を語ったものである。もうひとつは'The Keep of the Bridge'（13.7.1829）と題された1ページ足らずの原稿で，そこでは好奇心にかられた若者が妖精のすみかに誘われ，真っ暗な土牢に閉じ込められた恐怖を語っている。こうした超自然的な出来事を扱った物語は，1830年になるとさらに多く書かれるようになる。そのひとつのきっかけとしてシャーロットが体験したある不思議な出来事を記録した'The Following Strange Occurence'（22.6.1830）に触れておきたい。シャーロットはその日の早朝に起こった事件を記録している。それによれば主のお告げを受けたという見知らぬ老人が牧師館の玄関に現れ，キリストの訪れがあるのでお迎えの準備をするようにといった。折りしも父ブロンテ氏が病に伏していたため，シャーロットはひどく不吉に感じ，恐ろしさに涙が止まらなかったと書いている。幽霊や死後の世界へのシャーロットの関心はつよく，とくに30年にはそれを主題とした作品が多くみられるようになる。'The Adventures of Ernest Alembert'（25.5.1830）もそのひとつで，そこでは死を間近にした人の前に現れて死出の旅支度をさせるという霊に案内されて，アーネスト・アランベールが妖

精の国に向かう。美しい音楽が奏でられる華麗な宮殿で彼は何年か過ごすものの，やがて人間の世界が恋しくなり帰還するという話である。'Leisure Hours' (22.6.1830)も妖精に捕えられ，5年のあいだ妖精の召し使いとして仕えた老人の話をチャールズ卿が語ったものである。守り神や小王や女王たちが超能力を発揮する場面は，29年のIslandersやYoung Menにもふんだんに見られる。だがそこには超自然現象が引き起こす幻想性，怪奇性，恐怖や戦慄といった雰囲気はうすい。30年に入るとシャーロットの関心は守り神たちや小王や女王たちが繰り広げる不思議な魔法よりも，超自然の世界のもつ神秘性や幻想性へと向けられていったということができよう。

筆名Lord Charles Wellesley

1830年の原稿の特徴の一つはすでに指摘したように，その大半がチャールズ・ウェルズリ卿の筆名で書かれていることである。前年の筆名であったトリー大佐は'Young Men's Magazine'に収録された'Frenchman's Journal'その他を書いているに過ぎない。彼はいまやグラスタウンの文学界に君臨し，チャールズなどの若手の作家たちの妬みをかっている。シャーロットはチャールズを筆名とするにあたり，彼の性格をいちだんと中傷好きでせんさく好きで皮肉屋の若者に仕立てあげ，生真面目で退屈なトリー大佐とはかなり異質な視点と語りを採用している。たとえばそれが顕著に示される作品として'An Interesting Passage in the Lives of Some Eminent Men of the Present Time' 別名'An Interesting Incident in the Lives of Some of the Most Eminent Persons of the Age' (18.6.1830) があげられる。その序文でチャールズは，召し使いをつうじて知ったグラスタウンの名家のスキャンダラスな内情について，そのうちのいくつかをご紹介しようと皮肉たっぷりに前置きする。彼が暴露する事件にはトリー大佐をはじめ，父のウェリントン公爵，バッド父子，医師のヒューム・バディなどのグラスタウンの名士たちが関与している。トリーらが共謀して公立図書館の蔵書を盗み出し墓地に隠したところ，解剖のための死体盗掘をしていたヒューム・バディの一味と出くわし恐喝され，殺人事件にまで発展するという話である。これは1828年に実際に発生した事件（バークとヘアという殺人者が，ノックス医師に解剖用の死体を売った事件）や，父ブロンテ氏が属していたキースリ機械工協会で発生した蔵書の盗難事件にもとづいている。グラスタウンでの事件は関係者の手でもみ消されるが，真相を知るチャールズは折に触れ当てこすりをいっては楽しんでいる。

チャールズの皮肉，風刺はそれからさらに一月後に書かれた'The Poetaster, A Drama in Two Volumes' (3—8.7.1830) でいっそう激しさをます。そこではヘンリー・ライマーを「へぼ詩人」呼ばわりし，彼の感傷癖やロマン派詩人気取りの大げさな身振りを滑稽に演じて見せる。ライマーはかつてのブランウェルの筆名の一つで，のちのヤング・スールトである。従ってこの風刺はじつは弟ブランウェルに向けられたものなのである。さてライマーはドゥアロウ侯爵とチャールズ卿を

たずね，自作を披露するが相手にされない。つぎにトリー大佐をおとずれパトロンになってくれるよう依頼するものの，詩のあまりのひどさを罵倒される。かっとしたライマーはトリーを殺してしまう。今しも処刑が行われようとしているところへチャールズが駆けつけ，トリーが息を吹き返したのでライマーは許され，二度と詩をつくらないという条件で釈放される。'The Poetaster'から一月余りして，チャールズはさらに'Young Men's Magazine'10月号の'Conversation'（23.8.1830）のなかで，ライマーことスールトが自然の美しさをうたう自分の言葉に酔って失神するさまを滑稽に描いている。自己陶酔の気味があり，ともすれば感情に走り理性を失いがちなスールトに，シャーロットはブランウェルの姿を見ていたのだろう。'Characters of the Celebrated Men of the Present Time'第4章（17.12.1829）に見られるヤング・スールトの説明には，「身だしなみには無とんじゃくで酒や賭事を好み，その詩には想像力は感じられるが韻律は不得手」とあり，ブランウェルの面影を伝えている。

'Young Men's Magazine'

つぎにYoung Menのための「雑誌」の第2シリーズについて述べる。シャーロットは1829年の8月にブランウェルから'Branwell's Blackwood's Magazine'を引き継ぐと，それを'Blackwood's Young Men's Magazine'と改題して，12月号まで出して第1シリーズを締めくくった。30年8月には第2シリーズとして名称をさらに'Young Men's Magazine'と短縮し，12月の2号も含めて合計6号（そのうち9月号はタイトルページしか残存していない）を出している。構成や形式は第1シリーズとほぼ同じで，物語，紀行文，日記，詩，談話などから成り立っている。巻末の索引によれば合計21篇あり，筆者別にみるとチャールズ卿が6点(詩1，物語，書簡，紀行文など5)，ドゥアロウ侯爵が6点（物語1，詩5），トリー大佐が4点（日記），編者すなわちシャーロットが5点（談話）となっている。この第2シリーズで注目されるのは，8月号から12月号というタイトルは付いているが，実際には8月12日から9月4日までの半月あまりの間に集中的に書かれていることである。1830年7，8月のシャーロットは'Tales of the Islanders'第4巻，'The Poetaster'2巻，'Young Men's Magazine'6号を書くという健筆ぶりであった。これだけの作品を立て続けに書きまくったのは，おそらくシャーロットの心を捉えてはなさない主題があったためと思われる。

1830年に入ってシャーロットがとくに強い関心を示すようになった主題のひとつに幻想，怪奇があげられることはすでに指摘したところである。'Young Men's Magazine'でもそれはかなりの紙面を与えられている。まず幻想物語として12月号(第1号)に掲載された'Strange Events by Lord Charles Wellesly'(29.8.1830)を紹介する。チャールズ卿は昨今の風潮にもかかわらず自分は超自然的な事柄を信じるものであると前置きし，その根拠として自分のふたつの体験談をかたる。そのひとつはチャールズが図書館でもの思いにふけっていると，突然，自分も周囲の人間たちも実在感が失われ，

現在の自分たちの姿があの世の自分たちの幻に過ぎないように感じられた。すると目の前に巨大な自分の化身が現れたという。またもうひとつは今から1，2年前のことになるが，満月の夜に月に自分の寿命を問いかけ答えを得た友が，はたしてその予言どおりに20年後に死んだという話である。12月号（第2号）の'An Extraordinary Dream by Lord Charles Wellesley'（4.9.1830）では，チャールズが自分のみた悪夢について語る。ある日の午後，チャールズ卿が誰もいない父の書斎でうたた寝をしていて夢をみる。その中で川のほとりを歩いていたところ急に足元が崩れ，川に落ちずぶ濡れになる。家に帰って濡れた体を乾かしていると，兄が帰ってきて，蒼白の弟にわけをきく。その晩，チャールズはいくつもの夢をみ，その中でトリー大佐に殺されそうになり叫び声をあげて目が覚める。死人のような顔をしているチャールズのために医者が呼ばれ，彼は意識はあるにもかかわらず体は硬直し冷たくなり，やがて医者が臨終を宣告する。チャールズは棺におさめられ，葬式も済み納骨堂に安置される。ようやく金縛りが解け棺の中でもがいていると，お参りに来た父と母がそれに気づき，チャールズは救出される。弟の帰還に驚いたアーサーが，この2週間のあいだどこに行っていたのかと問う。彼の失踪に人びとが大騒ぎをしていたのだという。数日後，チャールズは夢の中とおなじ川のほとりに立ち，夢とおなじように川に落ちてずぶ濡れになって家に帰り，体を乾かし…夢とおなじことが繰り返される。だが翌朝，チャールズはすがすがしく目覚める。いずれの物語も死を主題としたもので，とくに後者は生きながらの死と永劫回帰的な悪夢が，幻想的で怪奇的な雰囲気をつくりあげている。こうしたロマン主義的傾向をもつ作品は，ほかにも11月号の'A Song, by Lord Wellesley'(27.8.1830)の長編詩や，同号の'A Frenchman's Journal,Continued by Tree'（23.8.1830）の死の劇や，'Visits in Verreopolis, Volume Ⅰ'の第5章（28.8.1830）でチャールズ卿の亡霊が出現する（いたずら）場面にもみられる。

シャーロットは12月号（第2号）の最後に短いConcluding Addressをのせ，読者に雑誌の終結を告げている。そこには長く骨の折れる仕事を成し遂げた誇りと，荷を下してほっとした気持ちとがあふれている。1826年6月から1827年12月にかけて始められた劇が，1829年3月から豆本にまとめられるようになり，シャーロットはその中心になって詩，物語，劇，批評などを精力的に書き続けた。さまざまなジャンルの作品を試行錯誤しながら書くうちに，1830年の半ばには独自のテーマと世界とを確立していった。はじめの頃のあやつり人形の世界が，いつのまにか登場人物がひとり歩きする自律的な世界へと変わっていく中で，シャーロットが当初の劇の枠組を脱ぎ捨てようとするのも自然な成行きであった。

㈣グラスタウン物語

IslandersとYoung Menの劇は，その主要な登場人物が重複していることもあって，その世界はそ

れほど明確な対照をなすわけでなく，物語によってはどちらの劇に属するのか判然としないものもある。そのことは偶然にはじめられた子供たちのいくつかの劇が，書きつがれていくうちに次第に一つの空想世界に融合されていった過程と見ることができよう。1830年半ばころまでには，それらはグラスタウン物語としての輪郭を整えるにいたった。ただここで注意しなければならないのは，グラスタウン物語とはグラスタウンを舞台に展開する一連の物語群の総称であって，一つの作品を指した名称ではないということである。いずれの作品をもってグラスタウン物語の始まりとするかは難しい問題であるが，ここでは'Albion and Marina' (12.10.1830) をその成立の目安と考えたい。当初の二つの劇IslandersとYoung Menの舞台と人物が融合された作品であること，今後の物語の中心テーマとなる恋愛が導入された最初の作品であることが，その主な理由である。1831年に作成されたブランウェルの地図によれば，当初のYoung Menの舞台であった「十二人の勇士」の王国は拡大し，ウェリントン，スニーキー，パーリー，ロスの連邦国になっている。シャーロットはその中央政府がおかれたグレイト・グラスタウンを舞台として，ウェリントン公爵一家をはじめとする貴族，作家，政治家などの上流階級の人びとをめぐる諸事件を物語化していくのである。

恋愛物語

1830年の作品で怪奇，幻想の要素とならんで目立つのは，新しい要素として恋愛が加わったことである。'Young Men's Magazine'ではもっぱら'Conversation'の欄で取り上げられ，せんさく好きのチャールズが中傷したり冷やかしたりしている。たとえば8月号 (13.8.1830) ではトリー大佐が身分不相応にも女性に贈物をして破産しそうになったのをドゥアロウ侯爵に助けてもらったことをチャールズが暴露する。また10月号（23.8.1830）と12月号（1.9.1830）では，グラスタウンの著名な画家ド・ライルによるマリアン・ヒュームの肖像画にドゥアロウ侯爵が目を奪われ，しだいに彼女に心をひかれていく様子が伝えられる。じつはドゥアロウ侯爵とマリアン・ヒュームの恋愛は，すでに'The Poetaster'第1巻第2場（3.7.1830）に取り上げられている。そこではチャールズ卿が前の晩にみたという夢の話を父と兄に披露する。夢のなかで森の奥にある館に誘われていくと，そこに緑の衣と白いスカーフに身を包んだマリアンの姿が見えた。その部屋にキューピッドが現れ，矢の先に刺したドゥアロウ侯爵の血まみれの心臓をマリアンに捧げる。すると彼女はそれを鋏で切り裂いたという。これはドゥアロウがヒューム・バディ医師の娘マリアンに恋しているのをからかったもので，二人の恋愛を描いたのちの'Albion and Marina'への伏線といえる。マリアンが登場するのはこれが初めてである。そればかりでなくグラスタウン物語にヒロインが登場するのもこれが最初である。それまではグラスタウンはもっぱらヒーローの世界であり，女性の登場人物はみられても端役でしかなかった。シャーロットは自分の主人公（もはやウェリントン公爵ではなく，ドゥアロウ侯爵に移っている）の成長にともない，恋愛や結婚のテーマを導入することを思い付いたの

であろう。1年余りにわたったIslandersやYoung Menの劇も終結した今，シャーロットはそれまでの冒険，政治，風刺の世界から，恋愛，結婚，嫉妬といった情念の世界に移っていく。そしてドゥアロウとマリアンの幼い恋を冷やかし妬むのがチャールズの役どころになっていくのである。

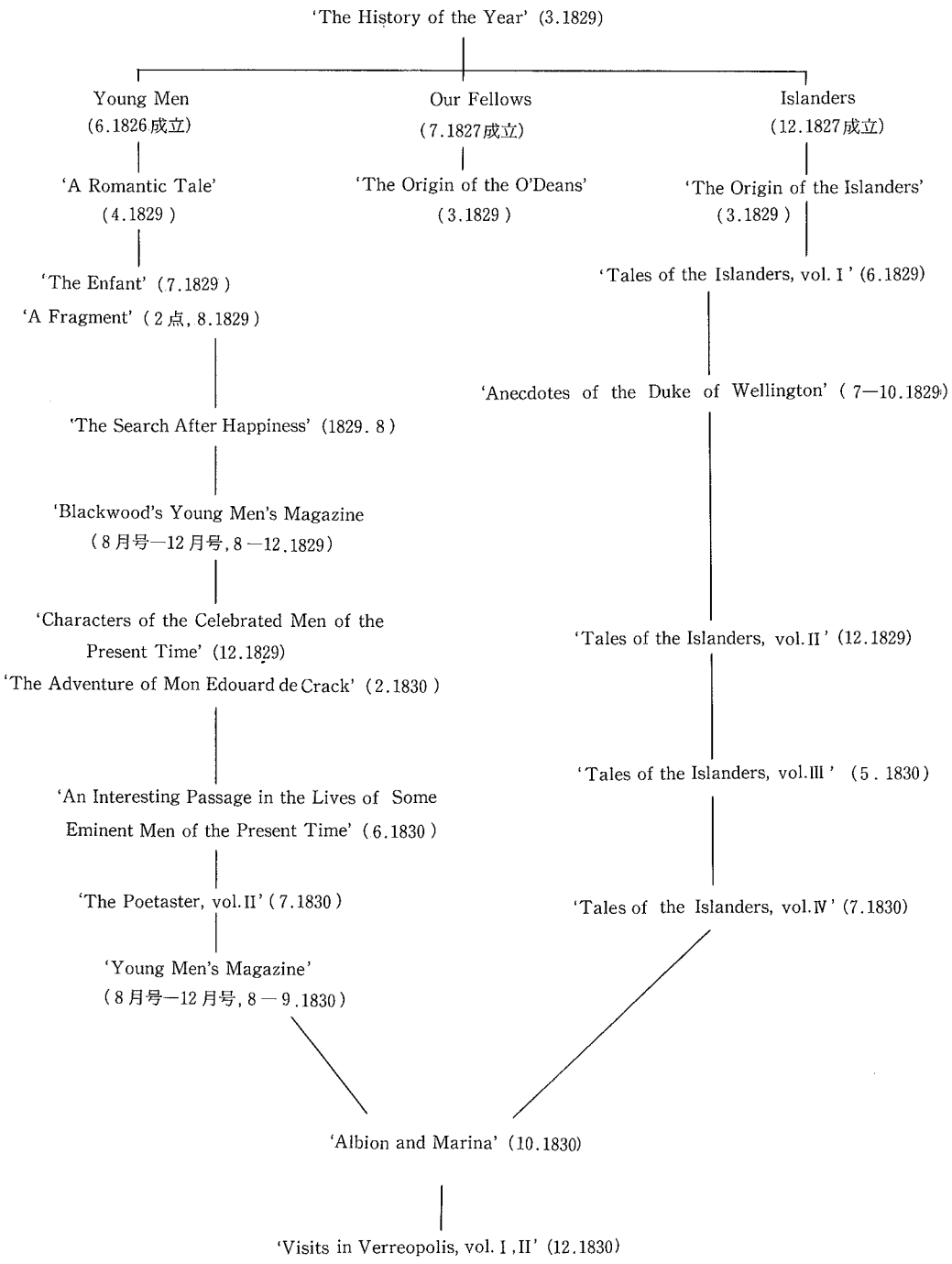
続いて'Albion and Marina, A Tale by Lord Charles Wellesley'（12.10.1830）について述べる。これは14歳のシャーロットによる最初の恋愛物語だが，甘美なロマンスではなく悲恋に終っていること，またチャールズ卿という皮肉な語り手が用いられていることなどで興味深い。チャールズは序文で，この物語は「仕返し」のつもりで書かれたもので必ずしも真実に基づいてはいないとし，登場人物の名前も多少変えてあるとしながらも，実際にはたやすく類推できるようになっている。チャールズの語り口には兄への嫉妬と，その恋愛をからかって意趣返しをしようとする屈折した心理がうかがえる。物語の梗概はつぎのとおりである。アルビオン（ドゥアロウ侯爵）は卑しい生まれのマリーナ（マリアン・ヒューム）と恋に落ちる。だが父は若すぎる二人の恋には時の試練が必要であると考え，4年後に帰国した時には二人の結婚を認めると約束して，家族をつれてグラスタウンに移住する。教養も容貌も申し分のないアルビオンはグラスタウンの社交界でもてはやされ，やがてグラスタウン随一の才媛と呼び声の高いゼルジア（ゼノウビア・エルリントン）に出会い，彼女の洗練された話術や身ごなしに心を奪われる。だがその夜マリーナの幻が現われ，「わたしを忘れないで」と訴える。父の許しを得て帰国したアルビオンを待っていたのは，マリーナが夢枕に立ったその時刻に息絶えたという知らせであった。

物語が悲恋に終るのはチャールズが書きかえた（実際のマリアンは後にドゥアロウの2人目の妻になり，息子を一人生む）ためであるが，悲劇の原因がアルビオンの心変わりにあることに注目したい。アルビオンを虜にするゼルジアことゼノウビアが登場するのは，これが最初である。緑か純白の衣をまとったマリアン・ヒュームとは対照的に，ゼノウビアは真紅のビロードの衣装に身を包んだ妖艶で情熱的な女性として描かれている。シャーロットはすでに最初の恋愛物語において，対極的ともいえる2種類のヒロインを作りだし，一人の男性をめぐる三角関係の状況を設定しているのである。'Albion and Marina'ではまだ「嫉妬」のテーマは顕著ではないが，それがシャーロットの関心をとらえたことは，2カ月ほどして書かれた'Visits in Verreopolis, volume I'（7—11.12.1830）に明らかである。執筆時期は'Albion and Marina'よりも後だが，物語の時間と状況はそれ以前に設定されており，そこでは12, 3歳のドゥアロウ侯爵がすでにマリアン・ヒュームに恋をし，そをゼノウビアが嫉妬しているのである。兄に用事を頼まれてゼウノビアを訪ねたチャールズは，二人の仲をきかれて答えるうちに，逆上したゼノウビアに階段から蹴落とされる。失恋から死んでしまうマリーナとは対照的に，むくわれない思いに狂気に駆り立てられていく女の姿がここにある。

嫉妬を取り上げている点で'Visits in Verreopolis, volume II'の第2章'The Fairy Gift, A Tale'（18.12.1830）も興味深い。妖精から4つの願い事のかなう指輪をもらったバッドは美男子に変身

し，城の未亡人を虜にし，やがて結婚する。だが妻をはじめ上流階級の人びとに嘲笑されるので，幸せでない。ところがある娘がバッドに好意をもつと，妻はそれを嫉妬し夜半に魔術をつかってその娘を呪い殺そうとする。夫がそれを知ると，妻はつぎには夫に襲いかかり魔性の本性をあらわす。妖精に救われたバッドはふたつめの願いごとをするが，それも幸せをもたらさず，けっきょく元の自分に戻ることを選ぶ。この話にはこれまでになかった男女の葛藤がみられ，シャーロットの今後の恋愛物語の方向を示唆しているように思われる。シャーロットはロマンティックな恋物語に飽き足らず，そこに複雑な三角関係や嫉妬という情念を導入し，それはやがて「アングリア物語」の主要な要素のひとつとして発展していくのである。

追記

第II・III期の初期作品についての研究報告は，アレグザンダーの編集の完成を待つこととする。

初期作品の構成・第Ⅰ期（1826—1830）